
波打ち際の金貨

佐嶋千代美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

波打ち際のコイン

【Nコード】

N5647Y

【作者名】

佐嶋千代美

【あらすじ】

何気ない「故郷」の存在。

留まり続ける妹と、背を向ける兄との、歪んだ傷・見えない絆とは

……

2010年・いさり火文学賞応募作品（選外）に加筆修正

個人サイト：Spiral掲載 <http://sspiral.fool.jp/s/>

(一)

潮風渡る北海道の一観光都市で、私は生まれ育った。都市とは名ばかりで、田舎染みた港街だと思っただけれど、幸いなことに観光に来るお客様は「レトロで素敵ね」なんて好意的に受け取ってくれている。

物は云いようだな。その前向きな思考は、是非、見習いたいと思いながら、海岸を見下ろすカフェで私は働いている。

週に一度の休日の朝。

けたたましいチャイムの音と共に、私は目を覚ました。

小さく呻き声を上げながら、手元の携帯電話で時間を確認する。

午前八時。宅配便が届くような時間ではない。

ご近所付き合いと言っても、すれ違いは挨拶を交わす程度。こんな時間に訪ねて来るような友人にも心当たりはない。そして、すぐさま対応できる身なりでもなし。

私は寝返りを打ち、そのまま居留守を使うことに決めた。

軽く開けていた窓から、朝の涼やかな風が滑りこんでくる。季節は初夏から夏へと頃合いを変えていて、きつと今日も暑くなる。そんなことを考えながら、まどろみの淵を楽しむ。

……さん、スエコさん！

しかしその甘ったるい気分も、風と一緒に舞い込んできた男の声で霧散した。

「お留守ですか、スエコさん！」

スエコ、そう私を呼ぶ男性は、身内以外に居ない。

反射的に跳ね起きて、寝ぐせだらけの髪も気にせず、窓を大きく開け、外を覗いた。

「あ、スエコさん」

見下ろした先、玄関の前で、やたら人懐っこい笑顔の青年が、連

打するチャイムの指を止めて、こちらを見上げてきた。

その姿に見覚えは無い。声の時点で解っていたことなのに、落胆してしまう。

「……どなたですか？」

私は二階の窓から、寝起きで掠れた声で尋ねた。

「お兄さんの、……政さんの、会社での後輩です」

朝の爽やかさを体現するかのように、彼は歯切れよく答えた。
年の離れた兄といえば、故郷であるこの街から列車で三時間ほどの都会で暮らしている。

両親が亡くなってからも、年に一度の法要にさえ滅多に顔を出さないような人。

スエコ、と。私を呼ぶのも、今はそんな兄しかない。

甘く懐かしい、幼い記憶が甦り、チクリと胸を刺す。

「どういった、ご用ですか？」

「連休で立ち寄ったものですから、ご挨拶をと思ひまして。」

連休……ゴールデンウィークの連休をずらしたのか、盆休みの前倒しか。いずれにせよ、今は完全にイベント事のない平日だ。

兄の会社の詳細は知らないし、兄からそんな後輩が居るとも聞いていないし家に来るとも聞いていない。とはいえ、この時間ならば兄は出勤途中だろうから確認の電話をかけるのも憚られる。

私は一つ唸り声を上げ、肩上で揃えた髪をかきあげる。短い直毛のくせに絡まりあつて恰好がつかないのは、この際、仕方がない。

「十分、待つてください。待てますか？」

「あ、はい、それはもう」

返事は声だけで確認し、私は自室の窓を閉めた。

こんな時間じゃ、近所には営業している喫茶店もない。

女の一人住まいに初対面の人間を上げるのは気が進まないけれど、昔の呼び名を知っているような人なら、大丈夫……たぶん。

「いざというときは、頼むよ」

着替えを片手に部屋を出ると、ドアの前で丸くなっていたキジト

ラ模様の飼い猫が、気のない声を返した。

簡単に身支度を整えてから猫へ水と餌を用意してジャスト十分。私は玄関のドアを開けた。

「おはようございます。お兄さんに会社でお世話になっています、武田と申します」

「兄が……お世話になってます 安藤季です」

兄はシステムエンジニアとして、IT関連の企業に勤めている。デスクワークがメインの部署だと聞いていたが……、そんな職場に似つかわしくない体育会系の体躯の青年に、私は僅かながら気圧された。窓から見下ろした時には気づかなかったが、縦にも横にも大きい。連休で訪れたと言う割に荷物が少ないことから、旅慣れた印象を受ける。

小ざつぱりとした身なりと、人好きのする笑顔が、威圧感を薄れさせていた。

「すみません、寝起きなので珈琲くらいしか出せないんですけど」

「いえ、こちらこそ急に押し掛けたものですから。……その、お兄さんから聞いていませんでしたか、今回の事」

「ええ……」

何も。そう続けようとした時、ジーンズのポケットに突っこんでいた携帯が震えた。

このタイミングでまさか、と思ったけれど、案の定、兄からのメール着信だった。

「……。 たった今、来ました」

「あっはは、相変わらず酷いな、政先輩」

「相変わらず……ですね。」

幼い頃から、思い立ったら即行動・少しでも貯めておけば即忘却。そんな極端な人だった。

進学のため故郷を離れると決めた時も、そのままそこで就職を決めた時も。結婚を決めた時も、直前で破談となった時も。

いつだってあの人は、一人で生きている。進んでいる。周囲は後からついてくればいい、そんな背中に進んでいく。

そして私は、いつだって追いかけることもできずに置いてけぼりなのだ。

そんな兄は、今も変わらずにそのままの姿で働いているというのだろうか。武田さんの言いようが可笑しくて、肩から力が抜ける。

「どうぞ、上がってください。」

今度こそ、私は真っ直ぐに武田さんを見上げた。

「あ、でも、お仕事は」

「今日は、定休日なんですよ」

そうか、私が仕事へ出る前に一言だけ、というつもりだったのか。それにしたって、微妙な時間ではあるけれど……

丁寧なのか、間が抜けているのか。

初対面で簡単に判断するのは甘いかもしれないが、それでも悪い人には思えなかった。

「武田さん、出身はどちらなんですか？」

珈琲カップの用意をしながら、尋ねる。

用句に問題は無いのだが、どこかおかしい発音が気に掛かっていた。道内でないことは解るが、あとは西とも、東北ともつかない。

それら全てを少しずつ？い摘んだようなイントネーション。

来客用の椅子に腰かけていた武田さんは、軽く首を捻る。

「出身。出身ねえ。就職前だと秋田が一番長いかな。あ、大学なんですけど」

親が転勤の多い職業だったので、故郷らしい故郷がないんです。そう付け足した。

ちなみに、就職先は仙台で、一年目で大阪へ転勤となり更に翌年は名古屋、その後、今の場所へ飛んで来て以来、兄と同じ部署で働いているということだった。

大卒で就職して……。指折り数えて計算して、自分より年上であ

ることに驚いた。三十を越えている。せいぜい、一つや二つの誤差だろうと踏んでいた。若々しい、というより、もはや幼いに近い顔立ちとなるのだろうか。

「ですから、先輩からこの街の話を聞くのが、すごく楽しくて。以前から、是非、訪れたいと思っていました」

笑みを絶やさず話を続ける武田さん。私は思わず、カップを取り落としそうになった。

「兄……、話すんですか？」

「ええ、それは勿論。スエコさんの話もよく」

ガッシャン

今度こそ落とした。

「スエコさん？」

驚いた武田さんが腰を上げるが、大丈夫と制し、落としたカップを流し台へ持つてゆく。我が家には高価で華奢な食器は存在せず、床に落としたくらい、なんてことはない。

「嫌っているんだと、思っていました」

「え？」

「兄です。この街も……この家も、私の事も」

「まさかあ」

武田さんが直ぐに否定するところを見ると、本当に兄は、楽しい思い出を話して聞かせているのだろうか。それとも無理やり美化しようとしている？

「僕は兄弟が居ないから、とても羨ましく思っていましたよ」

「そうですね……」

「そつえば、ご両親は？ご旅行にでも？」

「え？……」

「先輩、スエコさんの話はたくさんするんですけど、親御さんの話題が無いんです。」

聞いても、いつもはぐらかされて。あのへそ曲りを育て上げたご両親にも、是非挨拶をしたかったのですが」

開いた膝に両手を乗せて、身を乗り出す彼の表情に悪意など微塵も感じられない。へそ曲がり、と実の妹を前にして評する様子にも、含みは一切感じられず、そして妹自身もあの人の曲がった部分を承知しているものだから聞き流してしまう。

ああ、兄さん。あなたって人は。

許していない？ 悔んでいる？ 何を考えているのか分からない。背中を向けられたままじゃわからない。

「両親は、他界しています。八年前、交通事故でした」

そこで、ようやく武田さんの顔から笑みが消えた。

「兄が、それを気にするような神経の持ち主だったら、それはそれで安心しました」

逆に、今度は私が表情を和らげる。それは本心から出た言葉だった。

珈琲を差し出しつつ、そこから無理やり話の方向を変えた。

連休と言っていたから、どのくらい滞在するのか、その間、何をするのか。

すると再び、彼に明るさが戻る。むしろそれが本題だったのだと告げる。

「スエコさんは、ずっとこの街に住んでいらっしゃるんですね」

「ええと、まあ」

一年間、関西の専門学校へ進学したけれど、六月の時点でご当地の暑さに白旗を上げ、就職は地元を決めた。それきり、私はこの街から出ていない。就職当時は職場の近くに一人暮らしをしていたが、親の死をきっかけに、実家へ戻ってきた。だから、この家は、一人と猫一匹で住むには些か無駄が多い。

「僕、郷土資料館を巡り倒したいんです。

オススメの場所とか、効率のいい順序とか、ご指南いただけますか？」

それはまた、年の割りに、珍しい趣味だ。

もつとも、「歩く・観る・食べる」が基本行動の街である、正しい選択だとも思えた。

特定の故郷を持たない武田さんは、故郷というものに憧れ、まとめて有休を取っては旅行の先々で郷土史を学ぶのだという。

インターネットや図書館で下調べをして、あとは現地の風を感じる。そうすることで、なんとなく、そこに息づく思いを汲みとるのだ。熱っぽく、そんなことを語る。

「浪漫ですよ、浪漫。特に、この街は面白い」

「ああ。異国情緒がどうか、言われますものね」

私は関西の学校へ通っていた頃、寮住まいだった。つまり、現地の学生たちが集うのである。笑ったのは、神戸横浜長崎、それぞれの出身の子たちも、地元のキャッチフレーズが同じ、「異国情緒のあふれる街」だったこと。

使い回されたフレーズは、どこへ行っても効果抜群であることが可笑しかった。

「いえいえ、そこではありません。スエコさんは、幕府介入以前の、こちらの歴史をご存知ですか？」

「……は？ ばくふ？」

全くもって予想外の切り込みに、私は言葉を失った。

「視点が変われば事情も変わりますでしょう。」

この土地は、日本史においても一つの要だったのだと思っているんです」

「要、ですか」

「日本史なんて持ちだすと、大袈裟ですけどね。北海道も中心地まで行くと、開拓の話しかない。いえ、もちろんそれだけではありませんけど、歴史としての花形はそこでしょう。いかに厳しい大地を切り拓いたか。新しい歴史を築きあげたか。それはそれで結構です」

ああ、私は何か、いけないスイッチを押してしまったのだろうか。武田さんの熱い語りが止まらない。

「切り拓いたということは、切り拓かれた側が存在している、そういうことです。そしてなにより、始まりはこの土地だった」

「……ここ？」

「古い文献にも出てくるように、この辺りは本土との交易の玄関口でしたから。それがやがて、国の統治する藩として確立するんですけどね。僕としては、それ以前、和人とアイヌが混在していた頃の事を知りたいんです」

玄関口。

天然の良港と言われるこの港街は、よくそう表現されてきた。

日本海を駆け巡る北前船、そして鎖国から開国へ。自分の知る、この街の華やかさと言えばその辺り。

それよりもっと古く、となると……

「武田さんの知りたいようなものは、この街の資料館では手に負えないかもしれません」

長いこと、この街に暮らしてきたが、藩史以前を扱う資料館となるとアイヌ民族や土器の時代まで飛んでしまう。

混在時代の資料……など、あっただろうか？

華々しい、まばゆい思い出。都合のいいことを美化して、大切に
して、辛いことには目を伏せて。

……それは

何のことだろう。誰の、ことだろう。

喉を通るコーヒーが普段より苦く感じる。

「それはそれで、興味深いですよ。勝者が何を遺そうとしたのか、それも歴史の側面ですから」

「勝者？」

「歴史は常に、勝者と敗者に分かたれる。勝者は、敗者の記録を消し、自分に都合のよいものに作り替え、後世へ伝える。自分の権勢が続くようにね」

「そついう……ものでしょうか」

「そついうものなんですよ。誰だって、自分に都合の悪いことは消

してしまいたい。正当化したいものですからね」

自分に、都合の悪いこと。

「誰だって、……だなんて、そんな、ひと括りに」

「ああ、言い方が悪かったのならすみません。僕の個人的な見解です。気になさらないで下さい」

ただまあ、そんな裏事情も覗きたくて、どんな形であれ資料があるのなら僕は知りたい。武田さんはそう結んだ。

「一週間……。結構、滞在なさるんですね」

「長期滞在用の宿は、政先輩に紹介して頂きました。ここです」

宿のホームページを印刷してきたものを、武田さんは取りだした。この家からも徒歩圏内の、海岸沿いにある民宿だ。観光地区の足掛かりに、良い立地である。

「大したおもてなしも、情報提供もできなくてごめんなさい」

「はは 謝らないで下さい。唐突に押しかけたのはこちらです」

「どうぞ、良い旅を。何もない街ですが、のんびりしていい下さ
いね」

せめて掛けてやれる言葉はこの程度だ。

私も明日から仕事だし、もう連絡を取ることも無いだろう。

「ええ。それでは。」

初めての街だろうに、揺らぐことなく真っ直ぐ進む背中を見送りながら、私はようやく起きてから何も食べていないことに思い至った。

居間へ戻ると、猫はすでに出窓で昼寝体勢へ入っている。来客があると落ち着かない性格なのに、武田さんの事は無害と判断したようだった。

遅い朝食を済ませたら、友人の元を訪ねよう。話を聞いてもらいたい気分だった。

(二)

勝者の歴史。

武田さんが話した一節を聞かせると、学生時代からの男友達である河野はカウンターの奥で眉を寄せた。

薄暗く、古びた喫茶店の体をしたこの場所は、彼の城である。

「そういう風に考えたことは無かったな」

「視点が斜めだね。さすが兄さんの後輩」

私は仕事でカフェに勤めているが、河野は趣味で洋菓子店ごっこをしている。

本人は正式に資格を持っていて、場所も保健所から許可を取っている。しかし不定期営業・非営利目的であり、畑違いの仕事で生計を立てているという、周囲からは「もったいない」と評される生活を送っていた。

実際、彼の作る洋菓子はとても美味しい。しかし、本当に気分が乗った時にしか作らないので、商売にするのは無理なのだという。

一年前、町外れの路地裏にある居抜き喫茶店を買取ったと聞いた時には何事かと思ったが、そう話す河野の表情は穏やかで、彼の作る菓子を食べられるのであれば、場所はどこでもいいと私は思っている。もったいないことなんか、何もないと思っている。

今日の河野は製菓気分ではないらしい。ただ、ストックのプリンがあつたので、それにホットミルクを添えて出してくれた。

牛乳、卵、砂糖、それからバナナビーンズ。

シンプルな材料で、シンプルに蒸し焼きしたプリンは、無駄なく最高に幸せな気分にくれる。

イマドキ流行りのナントカとかどうだとか、そういった一切に流されない、河野の菓子の味はどこか懐かしくて優しい。

流行りの店が作るような、話題の材料、斬新なデザインといったものには食指が動かないという。

洋菓子店で修業を積んで、結果的に体を壊した河野は、その時に心も少し、壊してしまった。今でこそ、こうして近い人間には菓子を作ってくれるけれど、立ち直るまで何度も壁にぶつかっている。「商売」というのも、壁の一つだった。

だから、「勝者」という響きにも反応したのかもしれない。

「勝ち負けで物事を判断するのは嫌いだけど、文化や領土に関しては、そういうものがあるかもな」

洋菓子の歴史も、同じようなものだ。付け加えてから、河野は考え込むように頷いた。

細身であるが筋肉質の、そしてオープンで負ったという火傷だらけの腕をカウンターに乗せ、身を乗り出してくる。

「柔軟だよな、この土地の人間は。良くも悪くも順応が早い」

「そうかなあ 価値観が古くて保守的だと思うけど」

「安藤は、親の付き合いを引きずってるから、そう感じるんだよ」

「仕方ないじゃない、親の家に住んでるんだから」

家賃の掛からぬ実家暮らし。傍目には楽に見えるが、それが悩みの種だった。

市内にだって親戚が居る。何かと心配をして、世話を焼いてくれる人も居た。

しかし、みんな口を揃えて、維持が大変だろう、家を取り壊して土地を売って、もっと楽な場所へ引っ越したらどうだ。そう話すのだ。うんざりだ。二十代半ば辺りからは予想通り、嫁ぎ先の心配までして下さる。

けれど、家を残し、私がここで暮らすことは、兄も了承してくれているのだ。兄妹間には、何の問題も無い。現状維持で困ることなどないのに。

「安藤は偉いよ」

オマケ、と言いながら、彼はカップのソーサーにクッキーを二枚、付けてくれた。

私が偉いのなら、きっと河野は強いのだろうと思う。

ココナツの風味が香ばしい一枚目を齧りながら、私は洗い物を始めた友人の横顔を上目で見やった。一重瞼の上、喜怒哀楽の表現が乏しいから、冷たい性格だと誤解を受けることも多いけれど、感情表現が不器用なだけで、曲げられない信念を持っている奴だということを知っている。

何度転んでも傷ついても、美味しいお菓子を作ることには心血を注いでいる。「商売にはならない」そう言いながら、趣味の範囲を越えたところで、作り続けている。

そんな、「どうしても手放せない、諦められないもの」……、キラ光るものなんて、私には思いつかない。

強いて挙げれば、「家」なのかもしれない。

親戚に口出しされても、兄が戻って来なくても、私にはあの家を壊したり、土地から離れたりなんか出来ない。幸せな記憶の残る場所を、そのままにしておきたかった。

けれどそれは、「叶えるべき夢」ではなくて、「縋りつく過去」でしかない。だから、私と河野はやっぱり違う。

「ねえ、河野はどうして、この土地の人間を柔軟だなんて思うの？」

「え だって、流されやすいだろ、メディアに」

「……」

これはまた、身も蓋も無い回答だ。

「アレが流行ってまーす、テレビで紹介されました！ その時の踊り様だったら、凄いぜ。今まで築き上げたものはなんだったんだ、つてくらい、簡単に受け入れるんだよな」

「……ああ」

例えばそれは食べ物やファッションや、それだけではないとしても、河野はそれで苦労しているのだ。私は苦笑って、ほんのり甘いホットミルクを口を含む。

「勝っても負けても、流行っても廃れても。ゼーんぶひつくるめて吸収して、そうしてここまで来たんだよな。俺、地元の歴史なんてそんな深く考えたことなかったけどさ。武田さんから、何か面白い

話教えてもらったら聞かせてよ」

「やだよ、今日は挨拶に來ただけだって言ってたもの。もう、会うことも無いよ」

「もったいねえなあ」

洗い物を終えた河野が、再びカウンターに肘をついて唇を尖らせる。何かもったいないと言うのか。

「だったら、ここ紹介しておこうか」

「無理だよ、俺が人見知りなの知ってるだろ」

「いくつの子供よ。あのね、人見知りが店を構えて菓子作ってるんじゃないわよ」

「ひっでえ！」

痛いところを突いてやって、私は笑いながら不器用な店主が営業する洋菓子店を後にした。

その夜、久しぶりに兄の声を聞いた。

朝のメールは、武田さんの到來を告げるものだと思っていたら、それだけではなかったからだ。

スエコ、と呼ばれるだけで、暖かい気持ちがジンワリと胸に広がる。話題は決して、暖かいことではないのだけれど。

「兄さん、今年も戻らないんだね」

「仕事が、どうしても抜けられないんだ。伯父さん達に、よろしく伝えておいてくれ。供物代なんかは、来週にでも振り込んでおく」

世話かけてごめん。謝り慣れた兄の言葉は毎年恒例のもので、それが私は嫌だった。嫌だったけれど、無機質なメールで済ませるくらいだったら、齒を食いしばってでも、その声を聞きたいと思う。

「……うん」

忙しい忙しいと兄は言うけれど、後輩の武田さんは一週間も休みを取っているよ。あれ？もしかして、その煽りを受けて、兄は忙しいのだろうか。後輩の趣味を優先させて、自分は親の墓参りにも行けないというのか。

……違うな。

言い訳にしてるんだ。

「あのさ、兄さん。武田さんの事なんだけど」

「ああ、なんだ？」

「面白い人だね」

「やかましい奴だろ。悪い奴じゃないんだが。何か迷惑かけてきたか？」

「休みの朝、八時に大声で起こされた」

「あははっ …… スエコ、お前、そんな時間まで寝てるのか」

「休日くらい、ゆつくりしますよ」

一緒に暮らしていた頃の兄と言えば、休日は昼過ぎまで寝ていることが常だった。真似をするように、私も休みの朝は酷く遅い。

チクリ、胸が疼く。そうだ、あの頃の兄さんは高校生だったじゃないか。あれからどれだけの年月が経っていると思う。どうして自分は今でも兄の残影を追いかけるんだろう。

囚われた意識を振り払うように、私は口を開く。

「そうじゃなくて、さ あ、父さん達の話って、してないの？」

「え」

「武田さん、私の事、『スエコ』って呼んでたよ。兄さんがいつも、そう呼んで話してたからって。でも、親の事は何も知らなかった。」

「……………」

「まだ、帰って来れないの……？」

「…… そうだな まだ」

「そっか」

それから少しだけ他愛も無い会話をして、私は電話を切った。

私がいつまでも、共に暮らしていた頃の兄の姿を引きずるように、兄もまた、他界した親の事を引きずっている。死に目にも会えなかったし、報せを受けて帰郷した時には既に焼かれて骨になってしまっていたのだ。仕方のないことかもしれない。

都会へ進学して、就職して、ぱったり帰ってこなくなった兄の元へ、両親が遊びに行こうとした時に起きた交通事故だった。居眠り運転のトラックに巻き込まれてのことだから、兄が気に病むことは無いと言い切ってしまうこともできるのに。そして、来ないなら行けばいいじゃない、と背を押した私を、恨むことだってできるのに。私達家族の歴史は、八年前で止まってしまったままのように思う。いや、兄が進学で家を出た頃から数えると気が遠くなる。

勝者は誰か。

ふと、そんなことを考えた。

こんな事に勝ちも負けも存在するわけではないが、このぎこちない兄妹関係、周囲を取り巻く状況は、誰が望んで作り上げたものなのだろうか。

そして私は、自分の望みを叶えることなんてできるのだろうか。しがみついている場合なのだろうか。

理由が何であれ、仕事に正面から打ち込んでいる兄が羨ましい。帰ってきてほしい、それは私の甘えたワガママでしかなくて、兄にとつての故郷は既に、あの都会なのかもしれない。

勝者は誰か。

常に幾つもの選択肢を持ち、自分の意思で逃げるも進むも選び取っている兄が勝者であるなら、敗者は私か。

兄の残影に振り回される私は、確かに塗りつぶされているのかもしれない。

暗い気持ちで、冷えたコーヒーを飲む。

床に自由極まりない恰好で仰向けに転がる猫を見て、なんだか毒気を抜かれた。

小さく笑い、一人じゃなくてよかった、とそう思う。

(三)

猫を飼いながら、食品に携わる職に就く難しさを、働き始めてから痛感している。

どれだけ気を配っても、猫の毛という奴は体のどこかに付着するのだ。

これといった制服のない店だったので、最初のうちは私服のまま働いていたが、髪の毛一本入れば大騒ぎと言う業界で、猫の毛が入るといのは論外である。

ランチタイムにそんな騒動があろうものなら、そのまま帰らせられることもあった。

自宅に「猫立ち入り禁止」の部屋を用意してみたが効果は薄く、今は職場のロッカーに仕事用の衣服をストックしている。こんなことをしているのは私だけである。

それでも猫を手放そうとか、職を変えようなどといった選択肢は出てこない。

どちらも私の生活に欠かせない、愛しい存在なのだ。「叶えるべき夢」ではないけれど、「譲れない大切なもの」ならば、いくつでも挙げられる。ふとその事に思い至り、胸の奥がくすぐったくなっ

た。

これはこれで、私は結構、幸せなのだ。

それを「充実」と呼ぶのかもしれない。

チカリ。

着替えを終え、オープン前のカフェを掃除していると、窓から見える海岸に煌めく何かがあることに気づいた。

波打ち際で揺ら揺らしながら、時折、日差しを反射してチカリと輝く。

なんだろう。綺麗だな。

空き瓶か何かのゴミの類だろうか。

そう考えるのが現実的だけれど、どうせだったら金貨が良い。外国製の、キラキラしたの。

専門学校の卒業旅行で欧州へ行った時を思い出す。余ったコインは日本円へ換金せず、記念としてジュエリーボックスにしまっている。

「安藤さん、どうだった？」

「え、あ、なんでしょう」

ぼんやりと窓の外を眺めていると、不意に調理場に居たオーナーから声をかけられた。

Tシャツにジーンズ、頭には日本手ぬぐいを巻くという適当な格好の河野とは違い、こちらは女性ながらビシッと白衣を着こなしている。料理は趣味だが接客が苦手という彼女は、進んで調理場から出てくるということはほとんどない。せつかくの美人さんがもったいないと思うが、お陰で私は、長いこと調理補助兼接客役として雇ってもらっている。

「河野くん、お菓子、作ってくれそう？」

「ああ……。うーん、やっぱり未だ、難しいようです」

「作り置きできるようなもので、売り切れ御免！ でもいいんだけどな」

オーナーの専門分野は料理であって、菓子は一通り作れるものの手が回りきらないそうだ。

なので、私が河野から分けてもらったロールケーキを持ってきた時、「彼が欲しい」と開口一番に言ったのだった。それ以来、なんとか彼の菓子をこの店に置こうと画策しているが、河野の返事はいつも「ノー」である。

「焼き菓子類でも、作りたてが一番らしくて、冷凍保存は論外なんですよ。適した設備があれば別ですけど」

そして一軒への卸だけで生活できるようなものではなく、かといって責任を負う身で仕事の掛けもちは無理である。長く続ける、という視点に立った上で、河野はそう回答していた。

「そう来るかあ。そうなのよね。うーん、ますます欲しい」

観光地区の外れにあるこのカフェは、眺めは良いものの、客の入りは浮き沈みが激しい。

鮮度命の洋菓子を専門的に受け入れるのは、少し難しい。もちろん、作り置きできる類だつてあるけれど、そんなラインナップじゃどこにでもあるオシャレカフェと差がなくなってしまう。

河野の略歴は、オーナーにも話しているから、無理強いできないことも知っている。それでも河野の菓子が良いのだと、カラリと笑つて言い放つ彼女が、私は好きだ。

チカリ。視界の端の波打ち際で、再び何かが煌めいた。綺麗だな。

快活に笑うオーナーも、真っ直ぐな信念を持つ河野も。

そんなことを考えながら、私はカフェの外に出て、オープンの看板を出した。

晴天に、少しくすんだ白い外壁が映える。ちよつとアンティークな建物は、今日も素敵だ。

普段よりちよつと忙しいランチタイムを終え、カウンターの片隅で休憩を取る。

賄いを食べ終えようとした時に、来客を告げるドアベルが鳴った。

「すみませーん、何か軽く食べるもの、 って、あ、スエコさん」

「武田さん。いらっしやいませ」

訪れたのはちよつと意外な人物。このカフェは彼が巡ると言っていた資料館関係からは離れた場所にあるけれど、観光での散策なら範囲内だ。

私よりも、武田さんの方が驚いていたのが可笑しい。そうか、カフェで働いている、というのは伝わっていても、それがどこかという情報は無かつたんだ。そういえば、私も話していなかった。

「ランチタイムは終わりましたけど、こちらのセットなら用意できますよ」

「あ、じゃ、それをお願いします。えーと、珈琲は食前で」

「かしこまりました」

笑いを噛み殺しながら、調理場へオーダーを通す。それから珈琲の準備を始めた。

「資料、集まりましたか？」

狭い店内、他にお客もなし。カウンター越しに声をかけると、武田さんは視線を窓辺からこちらへ向け、先日と同じく明るい笑顔を見せた。

「そうですね。昨日で大体巡り倒して、今日は息抜きです。明日からは図書館に行ってみようかと」

「ああ……。たしかに、あそこなら違った資料もありそうですね」

「調べる部分も、絞られましたしね」

「へえ？ この辺りの資料館も、お役に立ちましたか？」

意外だった。初めに聞いた限りでは、武田さんの欲求を満たすようなものはなかったように考えていたけれど。

「面白いようにね、一定期間の文献がすっぱり抜けているんです。後ろ暗いという自覚がはつきり見えて、良いですね」

「……良い性格をされていますね」

「よく言われます」

毒のない笑顔。けれど、毒気たっぷりの言葉。「悪い奴じゃない」という兄の評が脳裏を掠めて、馬鹿正直に信じてはいけない類の人なのだと認識を改める。

悪人ではない、でも善人でもない。そんなの、誰だって同じだ。

良い人だ、と信じるのは、疑うのを放棄すること。何を考えているんだろう、と探るくらいで、きっと人付き合いは丁度いいのだ。

「勝ったの負けたの、そういった事に拘るのは、もうそろそろ終わっても良いんじゃないかと思うんですけどね」

淹れたての珈琲を差し出すと、さっそく口元へ運びながら、武田さんは呟いた。

「歴史は難しいなあ」

だから解き明かすのが楽しい。推論であつても、自分なりの答えを見つけるのが楽しいのだと、武田さんはここ何日かで集めたらしい資料を開いた。

「私なんか、自分の歴史すら、どんなものなのか解りませんよ」

印象深い人生なんて送っていないもの。私が応じると、武田さんは「おや」という表情でこちらを見上げた。

「じゃあ、僕の方がスエコさん情報を多く持っていたりしますか」

「それはありません。兄の主観でしょう、絶対に偏ってます」

「はは 確かに。先輩、スエコさんの可愛い話ばかりですもん」

「……。あの人、何を吹き込んでるんですか」

「話しましょうか」

「……遠慮しておきます。そして、他の誰にも話さないで下さいね」

武田さんの瞳の奥に悪戯めいた輝きを感じ取り、私は一歩、後ずさる。タイミングよく、ランチの出来上がりの呼び鈴が鳴り、私はカウンターへと足を向けた。

武田さんがランチを食べ終え、席を立った時だった。

カラン、とドアベルの音。

レジへ向かっていた私は、反射で首を捻り、「いらっしやいませ」と声を出す。

「季ちゃん。久しぶり」

「……伯母さん」

親代わりに、何かと世話してくれる、父方の伯母だった。

「政くん、今年も戻らないんでしょう」

その一言が聞こえたのだろう、武田さんは一度浮かせた腰を、そつと下ろした。

「連絡が来ないところを見ると、やっぱり今年も季ちゃんに押しつけようってのね」

「紅茶でいいですか？」

話の流れを切り、武田さんとは離れた席へ案内する。伯母はその

事に疑問も抱かず、兄に対しての愚痴をこぼしながら椅子へ腰掛ける。振り向くと、オーナーが紅茶の用意をしながら、心配そうにこちらを見ていた。大丈夫です、と視線を返して、私は伯母の向かいの席へ着く。

身内に関することで伯母が来店する時は、空いている時間を理解した上なので、そのまま私が話し相手となることが許されていた。もちろん、途中で他のお客様が来れば話は別であるが。

「政くんだって、仕事が忙しいといっても、いい加減にちゃんと家の事を考えなくちゃいけない年齢だっていうのにな。全部押し付けられて、季ちゃんが可哀相よ」

「私が好きでやっていることですよ。あの家だって、まだまだ住めるし。元気にやっています」

「そうは言っても、あなたにはあなたの幸せがあるでしょう。居ないの？良い人。だったら伯母さんのね」

「ところで法要の日取りなんですけど」

強引に話を切り替えたところで、背後で吹き出す気配がした。武田さんだ。笑うところじゃありませんっての。

「兄は、ちゃんと連絡してくれていますよ。今はまだ、帰ることが出来ないって言ってました。仕事を抜きにしても、仕方のないことだって私も理解しています。……仕事に打ち込むしか、無いんじゃないかな」

「ほら、そうやって甘やかす」

「甘やかしてなんかいませんよ。もらう物はもらっていますから。」

また笑い声。もう！

「長男だとか家だとか……。もっとじっくり話す機会があったなら、それなりだったんでしょけど、私たちの家の場合は、そんな暇もなかったし。なあなあですけど、しばらくはこのままでいいと思っているんです」

「そうやって八年でしょう？どんどん、戻れないところまで行っちゃうわよ」

「……考えてます。心配かけて、ごめんなさい。伯母さんに、お世話になつてばかりなのに」

ああ、この会話を河野に聞かせてやりたい。

柔軟？ 順応？ 八年掛けても、押し問答の内容は変わらない。

頑なのは、私の方も、なのだろうけど。

だって、譲れない。譲れないし、無理強いもしたくない。古い風習を、無理やり押し付けないで。選択肢を減らさないで。

そう思う私は、やはり子供のまま、時間が止まっているのだろうか。間違っているのだろうか。

それきり私が俯いてしまったからか、伯母は紅茶を飲み終わると、法要についての打ち合わせだけ簡単に済ませ、立ち去って行った。

(四)

伯母の後ろ姿を目で追うこともできない私の前に、武田さんがそっと座った。帰るタイミングを逃してしまっていたらしい。

「政先輩、帰らないんですね」

帰れない、のではなくて。そうニュアンスを含めた言い回しに、私は無言で頷いた。

私の幼少の話をよく聞かせるくせに、親の話題は回避するという兄の事情を、武田さんなりに推測したようだ。

私は正解を話さなかったけれど、本当の答えは兄しか持っていないから、そのままが良いと思った。

「兄にとっては、向こうが故郷になっちゃってるのかな 仕事があるって、友達が居て、充実して、満足しているんでしょうか。田舎は、煩わしい事ばかりだから」

震えそうになる声を必死に抑えて、できる限り自嘲気味に響くように、意識する。幼稚な泣き言にならないように。

ああ、それでも無理かもしれないな。真っ直ぐに相手の瞳を覗きこむこの人には、どんな虚勢も無駄なのではないかとも、心のどこかで感じる。

「スエコさん」

困ったような声音で、武田さんが呼び掛ける。ただそれだけで、その先に言葉は続けない。

……チカリ、チカリ

胸の奥、揺らめく感情の波打ち際で、痛みを伴って煌めく何か。

チカリ、

神経を澄ませて、それが何であるのか探る。

大切な、大切だと思う何か。目を反らし、それでも手離すことはできなかった何か。

温かな記憶。戻すことのできない時間。

みつともなくしがみついて、それに縋って、拭い切れない後悔と罪悪感とない交ぜになり、それでも

「兄さんに、帰ってきて欲しい。やっぱりこの街が一番だなんて、言われたい。」

いつになってもいい、帰る場所をそのままにしておきたいんです。帰る場所はどこにあるのだと、伝えておきたい。兄は、そんなものの、とうに求めているのかもしれないけれど。

どうしようもない意地だと解っている。それを、兄が察しているだろうことも解っている。だから私は兄の帰りを待つしかできない。兄が、「待たなくていい」と言うそのギリギリまでは、待っていいのだ。

「……………」

店内に、重い沈黙が流れる。

気を遣ってくれたオーナーが、武田さんの食べ終えたプレートを下げ、淹れなおしたコーヒーを差し出す。普段はここまでしてくれない。尋常ならぬ空気を察してくれたらしい。うう、今日の私、役立たずだ。

やがて、考えながらの風で、武田さんが口を開いた。

「どうしてかなあ 僕らの仕事は………… ええ、僕を見て頂いてお分かりの通りなんですけどね。ある程度、休み希望は融通が利くんです。政先輩は有休も大分たまっているようなのに、まったく故郷へ帰りたがらない。そのくせ、妹さんから連絡一つないとぼやくんです」

「………… 兄、が」

想像ができなかった。

決して不仲ではないけれど、子供の頃からベタベタした関係でもなかった。

今では互いに自立して生活しているわけだし、連絡と言ったって親の法要に関する程度。頻繁に伝えるような地元のニュースだなんて目立ったものは特にないし。

むしろ、親の存在が唯一の繋がりであり、障害でもあった。

考えてみれば、電話を掛けるのはいつも私で、兄の方こそ連絡一つ超越さないではないか。

呆れてしまい、全身から力が抜けた。

「故郷に帰る・帰らないって問題ではなくて、その、上手く言えないんですけど」

故郷を持たない武田さんが、精いっぱいの言葉を探す。きちんと聞きとろうと、私は彼の瞳を見据えた。

「帰れる場所がある、って、思えるだけで、強くなれたりするものですよ。帰りを待ってくれる人が居るのなら、尚更です」

「待っている方は辛いんですよ」

「……先輩に伝えておきます」

神妙に目を伏せる武田さんの様子に、今度は私が声を出して笑った。武田さんてば、自分は何も悪くないのに、すっかり巻き込まれてしまっている。

「それで武田さんは来てくれたんですか？ 兄の代わり？ それとも興味本位？」

「最初に話したでしょう、僕の目的は、これ」

気を取り直し、人畜無害の笑みを浮かべて、武田さんはこの数日間であとめたレポートを掲げた。つまり、自分たち兄妹ではなく、ごく個人的な興味を満たすため、この街へ来たのだということ。

本当に本当に、家を訪れたのは、挨拶程度の気持ちだけ。

「……ははっ あはは ……そっかあ」

難しいことなんて何もなかった。

どの答えがベストかだなんて、他人に決められるものじゃない。自分自身がそう言ったはずなのに、周囲からの声が怖かった。いっただって怖かった。

全ては幻聴に過ぎない。私は私の、望むように生きていればいいのに。

「武田さんは、いつ、あちらへ戻るんですか？」

「……本当に、僕の話はどうでもよかったんですね。話しましたよ、有休は一週間。もう三日後には列車に乘ります」

「そう、……そっかあ」

裏表のない言葉を、笑顔で包んで伝える武田さんが、何となく眩しい。いいな。素直にそう思う。

「私も、行こうかな」

「……はい？」

「同じ列車で。兄さんが帰って来ないんだったら、こっちから行くつてのもアリですよ」

胸の中で、チカリ、煌めいて爆ぜる感情がある。

いつも追ってばかりだった兄の背中。けれど、私だって小さな子供のままじゃない。

歩み寄って駆け出して、その正面へ回り込んだなら、あの人はどんな表情をするのだろうか？

八年前、同じようにして兄の元へ向かった両親が、事故で他界した。その事がずっと、私の行動を制限していた。けれど、いつまでも縛られていたってどうしようもない。縛られる必要なんてないのだ。自分に枷を嵌めているのは、私自身なのだから。

家族四人で過ごした暖かな記憶は嘘じゃない。けれど、戻らないことも、受け止めるべき現実だ。そして形は変わっても、兄妹であることに変化はない。

「向こうでの兄さんの話、たくさん聞かせて下さい」

はつきりそう告げると、喜んで、と悪戯っ気たつぷりに武田さんは応じた。

(五) (前書き)

エピソード

(五)

「帰ったよー」

「おかえりー って、え？ は？ …… うん、おかえり。」

相変わらず営業意欲が感じられない洋菓子店へ、私は一週間ぶりに顔を出した。店主は少し驚いて、それから大きく驚いて、ようやく落ち着いて言葉を返す。

「なんだ、帰って来たのか」

「兄さんに会いに行ったただだよ。そりゃ帰ってくるよ」

心の底から不思議がる河野の様子こそ不思議である。首を傾げながら、私はカウンターの定位置に座った。

週に一度の来店ペースはいつもと変わらないけれど、今回はその間ずつと、兄の元へ身を寄せていたことを河野も知っている。

「武田さんと一緒に向こうに行く！ なんて切り出したから、ついに安藤にも春が来たとはかり」

「それはない。武田さん、故郷なしだもん」

「どういう意味だ？」

「一カ所に定住なんて出来ない人。逆に私はこの街から離れられない人。」

「遠距離だっていいじゃないか」

「どうして、無理やりそっちに持って行きたがるかな」

そんな選択肢、私だって思いつかなかった。河野の想像力に驚きながらも、私の声音は自然と不機嫌な色になる。

「お前の口から男の名前が出るなんて珍しかったから、気に入ってんのかと思った」

「それはそれ、これはこれ、でしょ。確かにね、良い人だよ武田さん。次の約束しちゃった」

「次？」

「この街の資料、ここだけじゃ物足りないらしいよ。秋にでも連休

とつて、今度は東北に行くって言つてた。津軽・下北をレンタカー借りてグルリだって。詳しく解つたら教えてもらうの。河野も、街の歴史に興味持つてたでしょ」

「……安藤、お前、そういうことこそ、自分の足を使えつて」

「同類に言われたくないわよ内弁慶」

「誰が同類」

そこまで言つて、互いに顔を見合せて笑つた。この話題は、ここまでにしておこう。

「パティシエさん、今日のオススメはなんですか？」

「ん、季節のフルーツを包んだクレープ。拔群に合う紅茶を淹れてあげよう。待つてなさい」

「はい」

私は椅子の下で足をバタつかせながら、良い子の返事をする。帰つて来たんだな。

都会の空気もたまにはいいけれど、私にはやっぱり、潮風が良い。洒落たカフェもいいけれど、流行りのスイーツも悪くないけれど、勤め先で飲む珈琲が好き。河野の作る洋菓子が好き。この街で過ごす飾り気のない休日が好き。

「故郷を離れるのは、故郷に帰ってくるためなのかもね」

シンシユンと音を立てるケトルを眺めながら、私は誰に言うでなく呟いた。

耳には、向こうで会つた兄の声が残っている。

『迎えに来てくれてありがとう』

少し困つた風に、それでもちつとも厭そうではなかった。武田さん曰く、照れていたのだそうだ。遠くの親戚より近くの他人。武田さんの方が、よほど兄を理解しているようで、何だか悔しい。

嫉妬はさておいて、そんな所が、私達は血の繋がった兄妹なのだと感じさせる。予想外の展開に弱く、それでも強がつて平静を装うのだ。バレていないと思つているのは当然同士だけ、というのが実に性質が悪い。

考えてみれば、兄が暮らすのは都会なのであって、田舎街暮らしの私が観光がてら遊びに行っただって不思議はない。けれど、私は八年間、拒み続けていた。

両親の事故を引きずっていたこともある。

兄が帰ってくるのが先。そんな意地も張っていた。きっと、兄も同様の思いを抱えていて、帰郷はできないけど遊びにおいで、の一言を切り出せなかったのだ。

意地っ張りで不器用な、似たモノ兄妹。

妹の私が先に気づいたのだから、来年こそは、帰ってきて欲しいな。盛大に出迎えてあげよう。

「どうぞ。浜みが少なめのスリランカティーでございます」

花のような香りが目の前に差し出され、そんな思考を中断させる。

「又ワラエリヤだね。良い香り！」

私の反応を見て満足そうに、河野は目を細めた。

「昨日、安藤のこのオーナーさんが届けてくれた」

「本当？　なんだ、そっちだって仲良しじゃない」

「馬鹿言え」

美人さんのオーナーは、私の兄よりも年上である。そこらの男性より男前な性格だから、女々しいところのある河野にはお似合いだと思っただけだな。

茶化してそう話すとキツく睨まれて、それから黄金色のクレープをカウンターに乗せてくれた。

「美味しそう……あ」

はらり。フォークを片手に皿を見下ろしたところで、私の肩から猫の毛が舞い落ちて、クレープの上に着地した。

「お客さん、後乗せのクレームは困りますよ」

「しないよ。やだなあ、来る時に散々、払ったのに」

どれだけ気を配っても払いきれないしつこさは、私の故郷への執着に似ている。そう考えると、なんだか可笑しかった。

「可愛い猫が居る限り、やっぱり私はここから離れられないね」

「それは結構なことだ。」

気まぐれな猫のような河野は、肩をすくめて応じた。

チカリ、波打ち際で輝く金貨。

遠く離れた場所から視認しかできないその正体が何であるか、私は解ったような気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5647y/>

波打ち際の金貨

2011年11月17日03時30分発行